

# 大好きな遊び

上坂元絵里



三年保育から受け持っている子ども達が、年長組になって二か月がたちました。ともすれば、大きい組なのだからとこちらの要求も高くなりがちで、もう少し育っ

て欲しいと思うこともありますが、時には、さあ私は何をしようかしらと思えるゆとりも感じられるようになってきました。

子ども同士の関係では、かなり仲の良い友だちは、はつきりとしてきていて、一定の友だちと遊ぶことが多いものの、遊びによってそれが入り混じったり人数を増したりして、小グループで役割を担いあったり、相談したりして遊ぶ姿が、ずい分見られるようになってきました。

私共の園では、子ども達のイメージとして、何となく大きい組になったらやるんだと思っている遊びも、いくつかあるようです。例えば、年少の時に、年長組の劇に呼ばれて見にいったのを覚えていて、今年は自分達が演じる側に回ったりしています。またお庭での、リレーや野球なども、新しい遊びのレパートリーに加わりました。今の時期、こうしていろいろな遊びが登場し、ひとつひとつの遊びに、かなりじっくりととりくめるようになってきていると同時に、また、次々といろいろな遊び

も登場します。お医者さんごっこ、歯医者さんごっこ、ミニ四駆作り、ペープサート、とこやさんごっこ、等々。

この様に、いろいろな遊びが登場してくる中で、三年保育の頃からかなり根強く続いている遊びに電車ごっこがあります。

年中・年少の組では、おへやに木製の線路と電車があり、入園当初より、これではとても良く遊びました。何しろ電車が大好きなB君も、入園式翌日に、「これでよく遊び、きちんと片付けました。」と記録してあります。その後電車の本を見ては、正面からの図を私に「描いて」と要求しては、細部を自分でも一生懸命、描いたり塗ったりして、幾種類もの電車のお面を作りました。そして六月に入ると、自分の乗れる電車が欲しいということで、ダンボールが登場しました。最初の数日は、大きい組の人に遊んでもらうのも、スベリ台をすべるのも、いつもダンボール電車に乗ったままという気に入りようでした。この頃のB君は、人が積木を片付けている

ところへ、つかつかとよって行って、「僕が片付ける」ととりあげてしまうような、一方的な人との関わり方が多く見られました。

三学期に入っても、ダンボール電車は、大活躍で、おへやで、いすや小型積木を使って、いろいろ工夫して駅なども作っていました。ただ、せっかくお友だちがそこへやって来ても、「そこに乗っちゃダメ。今、回送だから乗れないの。」と、自分の思い通りに遊ぼうとするため、まだお友だちとの交流は余り見られませんでした。年中になると新しい友だちが入ってきます。その中にB君をとっても慕ってくれるK君がいました。春の保護者会で、B君のお母様が「人より電車が好きだったBが、電車より人が好きになりました。」と話していました。が、B君にとってK君の登場は、ひとつの大きな節目になりました。

三歳児クラスから四歳児クラスへと子ども達は引っ越しをしました。が、年度の変わり目ということで、ダンボール汽車を処分してしまい、新年度早々に「あの汽車

は？」と尋ねられて、とても反省させられたこともあり  
ました。

また、年中になると、電車を描く方法が、絵でもとても立体的になってきて、遠近感があって感心させられました。そして、ダンボール電車も、紙（カレンダー裏紙など）を貼り変える毎に、工夫も加えられ、丹念に色を塗ることもできるようになりました。一生懸命作っていると、いくつでも箱をあげたい気になってしまうのですが、それでは、家でも園でも保管に困ってしまうので、ひとつのダンボールが、よれよれになるまで何度も衣装変えをして、生まれかわりました。同様にダンボール製の踏切も愛用され、表示を変えられる行先板は、殊にお気に入り、回送になったりいろいろな行先になったりして、遊んでいました。

そして、年長組の六月になり、相変わらずダンボール電車は健在です。ただ仲間が、多い時は、五・六台となり、運転手・切符切り・放送係などの役割分担もできて、お友だちといっしょの電車遊びになりました。

ただ一人、黙々とダンボールに紙を貼った上に、自分で決めた電車を描き続けていた時期もあったB君ですが、今では、彼が大事にしてきた遊びを通じて、お友だちとの関わりもずっとふえました。そして、楽しく工夫して、繰り返し遊ぶ姿を見ると、こちらまで嬉しくなってしまう。友だちが作る作業を手伝ってあげたり、また逆に、出来ない所があると、「B君にやってみようといえよ。」と友だちから頼りにされ、そのことが、B君の中で人と関わる楽しさを、しっかりと実感することにつながっているようです。

私たちは、常に、子ども達が人と関わる楽しさを知り、よりよい友だち関係を育んでいかれる人になって欲しいと願っています。B君は、年少の頃にはどちらかというと、自分の興味やイメージのままに動く方で、人のことを受け入れるのは苦手なお子さんでした。けれども、彼の中には、様々な周囲の事柄への関心・好奇心がとても旺盛で、いつも忙しそうなまでに、生き生きと遊んでいました。その彼の心の中の、豊かに動く感性・イ

メージが結果としてお友だちにとって、とても魅力的で、今のうちに友だちと楽しく遊べる様になることへ結びついてきました。

朝の登園の際、保育室へお母様と一緒にやってきたB君、あら、お早うのごあいさつはどうしたのかしらと思う時が時々あります。そんな時は、昨日改造した電車を、お母様に見せて報告したくて仕方がなかったりします。そんな風に、夢中になれる「思い」をもてること、とても素晴らしく、いつまでも大事にしてあげたいものとおもいます。

私の園では、子ども達は徒歩の人もありますが、電車やバス、地下鉄に乗ってくる人も多くあります。そのため、毎日の通園を通してそれらについて、細かく観察する機会に恵まれています。そして、自分が見たもの、発見したものを、幼いながらも、紙や身近な材料で、自分のイメージになるべく近い形で再現しようとするのが、遊びの中に見られます。また、こちらが意図的に教えるものではありませんが、電車の行先・駅名を通して、

漢字に興味をもったり、県名や地図を早くから見ようとするこへもつながっています。「先生、日本一高い所にある駅知ってる?」「そうそう、八ヶ岳の近くよね。何ていったかしら。」「野辺山っていうんだよ。小海線っていう電車が走っているんだ。」

早くから物を知ることが良いと言いたいものではありませんが、自分から興味をもち、それ故、より深く広くいろいろな事を知ろうとする心は素晴らしいと思います。

私たちは、お子さん達が本来もっている、こうした力を発揮できるように、ほんの少し援助してあげるしかできません。ただ、せっかく、今、夢中になって遊べる何かをもっているお子さんに、次はこれもおもしろいわよと新しいものを示して、お子さんの心を台無しにするようなことをしないようにしてゆきたいと思っています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)